会報　2020 年 10 月号

日本ニュージーランド協会（関西）　　創立 1970 年 11 月 11 日

New Zealand Society of Japan, Kansai

The flowing river never stops and yet the water never stays the same.
Foam floats upon the pools, scattering, re-forming, never lingering long.
So it is with man and all his dwelling places here on earth.

(Hojyoki)

皆様ご健勝のことと存じます。当協会は、お蔭様で本年創立５０周年を迎えておりますが、新型コロナウイルス感染問題の影響を受け、残念ですが記念例会を含め計画通り行事を開催することができません。今の状況では来年の予想も困難ですが、臨時例会を１１月１４日に開催することにいたしました。ウイルス感染状況が流動的な時ですが、１年近く活動をしないのも好ましくないと理事会で判断いたしました。参加・不参加は各自でご判断頂きたく存じます。当然のことながら３密を避け、感染予防対策を講じます。計画通り５０周年記念マグカップは製作いたしますので購入ご希望の方はご連絡をお願いいたします。秋が深まるにつれ感染リスクが高まりますが、どうぞご自愛ください。

春の Westshore（Napier）　Bluff Hill からの眺め（松沼清司）

事務局：〒５５０－０００２
大阪市西区江戸堀１－２３－２６　西八千代ビル３階Ｃ
電話・FAX：（０６）６６０７－２１１２
http://nzsocietykansai.com　E-mail:nzsjk@yahoo.co.jp

■　ニュージーランド大使からのメッセージ

当協会の創立５０周年を祝い ヘイミッシュ・クーパー(Hamish Cooper)大使からメッセージをいただきましたので会報に同封いたします。閣下は昨年８月にご就任されましたが、大阪の総領事、駐ロシア・トルコ大使を歴任されておられます。

■　50年前と今日では日本とニュージーランドの交流は比較にならないほど発展しました。残念ですが、人的交流ができない現在、ステイ・ホームの一環として東京のＮＺ大使館、ウェリントンの日本大使館のホームページを定期的に検索されてはどうでしょうか。　（事務局）

■　大阪万博とNZSJK創立

1970年３月から６ヶ月間、千里丘陵で大阪万博が開催されました。当会（ＮＺＳＪＫ）の大半の皆さん（今よりも50歳若い時）も含め、約6422万人が訪れました。ＮＺ館は「ニュージーランドとニュージーランド人」をテーマに南十字星をデザインした木造の５棟で構成され、野外劇場ではマオリの踊り・中庭のカフェテラスが人気でした。

ＮＺ館

スライド・映画・パネルでＮＺの歴史と自然が紹介されました。ＮＺ館の様子はＹｏｕＴｕｂｅで観ることができますので、ご関心があればどうぞ。当会は万博を契機に、日本ニュージーランド協会の関西支部として発足しました。後に初代支部長となる川瀬勇氏などは、ＮＺ館前で支部入会チラシを配り熱心にＰＲされました。11 月 11 日の大阪倶楽部での発会式にはＲ．Ｈ．ウェイド大使も臨席され、約40名が出席されました。

館内

カフェレストラン

■　本年の例会中止について

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、本年の下記例会は９月の理事会で検討の結果、残念ながら中止となりましたのでご了承ください。

１．ラム肉調理・試食例会　２．柿狩り例会
３．５０周年記念兼クリスマス例会

■　臨時例会のご案内（柿とマグカップ頒布会）

新型コロナウイルス感染問題の影響を受け上記の年内の行事は中止となりました。しかし、ウイズコロナの時代に入り何もしないのも問題があると考え、ソーシャル・ディスタンシング等を配慮して臨時例会を開催することになりました。会員相

互の顔見世的な内容です。いろいろなお考えをお持ちと思いますが、出欠は自己判断でお願いします。

11 月 14 日(土)13 時 30 分～15 時 30 分

中央電気倶楽部 1 階会議室　（マスク着用でご参加ください）

北区堂島浜２－１－２５

Tel：０６－６３４５－６３５１

・太津会員農園直送の柿数個と５０周年記念マグカップ 1 個を頒布

マグカップのデザインは、１５年前の創立３５周年に松沼会員がデザインされたものをご本人のご了承を頂き再度利用させて頂きました。

参加費:2000 円（お釣りはご用意しません）

定員:20 名（先着順）

マグカップ追加1個 1000 円(税込)

会場は 3 密にならないように工夫、5 名単位で順次入室方式。

大阪万博のＮＺパビリオン風景のＤＶＤを室内で上映。

ご希望者はコーヒーなどを臨時喫茶コーナーでお飲みいただけます。(各自負担)

申し込み:Tel/Fax　０６－６６０７－２１１２

携帯：０９０－１０２０－１９７１

締め切り:11 月 9 日（月）

◎感染状況により中止する場合もございますのでご了承ください。

マグカップのみご希望の方は送料４００円が必要、お申し込みは上記へ。電子レンジ耐用です。

マグカップのデザイン

■　姉妹都市の歴史書を翻訳･出版

私は本協会の会員ですが、姉妹都市交流にも長年かかわってきました。大阪府箕面（みのお）市とニュージーランド・ハット市（ロワーハット）は 1995 年姉妹都市となり、私の所属する箕面市ハット市友好クラブ（ハットクラブ）はその翌年、市民主体の交流を目指して結成された市民団体です。2015 年、当クラブは創立 20 周年記念事業の一環として、ハット市の歴史書 David McGill 著『Lower Hutt: The First Garden City』(1991) の翻訳・出版を企画しました。原書は、市政 100 周年を記念してハット市が著者に執筆を委嘱して発行した、市の公式な歴史書です。しかし、実際に始めてみると、予想以上に困難な事業で、足かけ 6 年を要し、本年 6 月『ロワーハット：最初の庭園都市』(B5 版 268 ページ) を出版することができました。　（写真ご参照）

ご参考までに、このプロジェクトを紹介させていただきます。2015 年、ハット市長から正式に文書で翻訳権を取得し、まずクラブ内で翻訳者を募集しました。それまでもクラブでは英会話プログラムを主催していましたので、めぼしい会員には手紙を出す等の工夫をして、6 人からなる翻訳チームを立ち上げました。(私もその一人ですが) 意欲も能力もある会員が揃ったことはラッキーでした。さて、実際に翻訳を始めてみると、現地の知識が圧倒的に足りないことに気がつきました。本書はＮＺの一地方都市の歴史です。地元の人にしか分からない固有名詞や表現が多く、マオリ語もあります。これはもう、ハット市民に直接聞くしかありません。メールで問い合わせ、来日したハット市民は訳者たちに囲まれて質問攻めにあいました。特にありがたかったのは、ハット市出身のＡＬＴ（Assistant Language Teacher 語学指導助手）が箕面市の小学校に着任していたことです。彼女とは二十数回ミーティングを持ち、全章にわたる疑問点を質しました。彼女は翻訳チームの準

メンバーのような、あるいはそれ以上の存在でした。分担して翻訳を進め、2016 年 2 月に初稿脱稿、その後、二度の推敲を経て、最後は文体統一のため、訳者代表が全文の手直しをしました。実質３年半の作業中、訳者間の意見対立などもありましたが、ついに 2019 年 5 月完成しました。私たち６人は英語の専門家ではなく、ＮＺの研究者でもありません。はたしてどの程度のレベルの翻訳ができるのか。これは私たちが常に意識していた緊張でした。翻訳の原則は意訳ではなく直訳とし、読むうえでの滑らかさより、正確であることを旨としました。翻訳が終わると出版の準備です。出版費用は自己調達しました。最初は外部の助成制度を申請したのですが成功せず、結局、全会員に寄付お願いの手紙を出し、41 名（会員数 60 余名）から 918,000 円の寄付が寄せられました。これに、ハット市からの 2,000 ドル（121,000 円）、ニュージーランド学会他の諸団体からの寄付と合わせ、所要資金を確保しました。

本年に入り、出版社と編集作業を始めましたが、折悪しく新型コロナウイルスのパンデミックと重なり、緊急事態宣言下での不自由な作業となりました。ニュージーランドでは一層厳しい都市封鎖となり、一時は出版延期の可能性もあったのですが、なんとか乗り切ることができました。こうして無事にプロジェクトは終了したのですが、これも多くの人たちの励ましと応援によるものであり、感謝の気持ちでいっぱいです。とりわけ、本プロジェクトは最初の段階からハット市側の良き理解と協力を得ることができ、当時の市長 Ray Wallace はパートナーのような存在でした。これは大きな支えになりました。

さて、本書の内容は、ヨーロッパ（主にイギリス）からの植民が本格化した 1830 年代から現代までの、約 160-170 年間の歴史です。先住民マオリとの土地をめぐる争い、本国の不在地主との政治的闘争、ハットリバーの度重なる氾濫、など数々の困難に直面しながら、決して希望を捨てなかった住民たちの感動の物語です。本書は国全体の歴史ではなく、地域の住民の物語であり、世界の動きや中央の政治とは一見かけ離れた、いわば地方紙の世界です。それだけに、その時々のエピソードを通じて住民の生の声が伝わってきます。

大多数の移住者は本国では生活できなかった貧しい人々でしたが、待っていたのは海岸でのテント生活から始まる厳しいものでした。その中で、彼らの数少ない楽しみの一つが、ハットリバー流域の豊かな土壌を生かしたガーデニングでした。20 世紀初頭、ベルビュー・ガーデンは南半球で最も美しい庭園と呼ばれましたが、それが本書のタイトル「最初の庭園都市」につながります。

足かけ 6 年にわたるプロジェクトでしたが、何度か困難に直面しました。それらを乗り越えられたのは、文化の異なるハット市民をより深く理解するにはその歴史を知ることが不可欠である、という認識を訳者たちが共有していたからだと思います。姉妹都市交流に限りませんが、表面的な交流事業を超える、より深い異文化理解はどこまで可能でしょうか。これから、本書の読書会などを呼びかけていく予定です。

なお、本書は非売品ですが、ご希望の方にはお分けします。頒価 2,000 円プラス送料 370 円、合計 2,370 円／冊となります。住所・氏名・電話番号を私までご連絡ください。振込用紙を同封してお送りします。

私のメールアドレス： tsato@hcn.zaq.ne.jp

（佐藤 敞）

■　The number eight wire(8 番ゲージ・ワイヤー)

昨年秋、NZ の友人から 1 冊のペーパーバックが届いた。書名は、「South Sea Vagabonds」。1939 年初版出版のノンフィクションだ。世界恐慌のさなかに職を失い、生活もままならない中で、資金ゼロから自分の手でヨットを建造し、その後の人生を南の海で過ごした J. W. Wray という NZ 人の自伝である。この本はしかし、海洋冒険談に止まらない。厳しい時代に、独創的な発想で、次々にふりかかる苦難と逆境を乗り越えてゆく勇気と忍耐力、どんな状況でも創意工夫で道を切り拓くニュージーランダー・スピリットの物語だ。私は、縁あって 1990 年代前半から NZ ワインの輸入を始めた。以来、タウランガにあるワイナリーのファミリーと仕事を通じて親交を深め、そこから多くの人と出会い、友人となって 30 年が過ぎた。ありがたいことだが、私が引退した今も、こうして忘れたころに本を送ってきたり、突然日本にやってきたりする友人がいる。Friendship forever だ。

ニュージーランドでは 2000 年前後に多くのワイナリーが誕生したが、私が一緒に仕事をさせてもらったワイナリーは 80 年代末期の創業だった。90 年代半ばに完成した新社屋は、競馬場ほどの広大な敷地の一角に建つアールデコ様式の美しい木造建築だ。晴れた日には、併設されたレストランのテラスで最高のワインとランチが楽しめ、見上げればニュージーランドの澄んだ空気のかなたに、抜けるような青空と白雲があった。だが、ワイナリーの始まりは苦労の連続だったと聞く。異業種から参入した創業者は、決して広くはない敷地に建つ、小屋のような建物で独創的なワインづくりを始めた。とても万全の環境になかったことは想像に難くない。あれが無い、これが不足していると言っていれば、今はなかっただろう。家族で力を合わせ、忍耐強く工夫を重ね、決して平坦ではなかった道を拓いたのだ。そうした努力の甲斐あって完成した壮大なスケールのワイナリーも、さらなるチャレンジだった。大きな設備投資を伴う醸造事業を始めることは、大きなリスクを伴ったに違いない。柔和な笑顔で自然体の紳士である創業者は、およそ 100 年前の本の著者と同じニュージーランダー・スピリットの持ち主だった。

8 番ゲージ・ワイヤーは、冒頭で紹介した本の introduction に使われている。

> South Sea Vagabonds fed intravenously into New Zealander’s self-image:courage, perseverance, ingenuity, right down to the number eight wire.
>
> (Bruce Ansley)

この本の初版から 100 年前にニュージーランドへやってきた開拓者には、広大な土地に畑をつくり酪農をする際、フェンス（柵）が必要だった。高価で時間と手間がかかるブロック壁などの代替品として使用されたのが、強靭にして柔軟、かつ安価な 8 番ゲージのワイヤーだった。かくして、今でも NZ では比喩的に「8 番ワイヤーがあればどんな問題も解決できる」と言い、この 8 番ワイヤー・メンタリティーを誇りとしていると聞く。私の解釈だが、それは、ニュージーランダーの勇気(courage)、忍耐力(perseverance)、実際的・実用的(practical)な考え方、発明心（ingenuity）そして中心にある can-do sprit だ。

ホークスベイのブドウ園への路

日本では、当時ニューワールドのワインと騒がれたものの、ワインは思うようには売れなかった。勿論、商品が良ければ売れるなどと甘く考えていたわけではないが、なかなかに厳しかった。しかし、万策尽きたかと思えた時にも、ワイナリーは、私に文句も言わず、最後までアイデアを持ち出し、

サポートを続けてくれた。何かが無くても、あるものを工夫する、あきらめずに、できると考えて挑むことを示してくれた。やがて、私のワインの輸入量は年間 10 万本を超えることになる。時代の流れ、時の運は勿論あったが、私が続けられたのは、彼らに教わった 8 番ワイヤー・メンタリティーのおかげだと思っている。ワイナリーは、欧米の品評会で高い評価を受け、輸出は英国、米国、そしてアジアへと拡大した。ワイナリーの事業は順調であったが、2020 年、諸事情により上記の敷地から、別のベイ・オブ・プレンティのワイナリーとパートナーシップを組み移転した。創業者は数年前に引退しており、すでに高齢だが新たな挑戦を始めていると聞く。またいつか会えればと思う。

私はといえば、2019 年に仕事を辞め、新たなチャレンジに向かおうと考えている。不思議だが元のワイナリーがなくなった今、それほどの残念も、さみしさもない。素晴らしい NZ の人々と知り合い、深い敬意をもって、共に力を合わせ一生懸命に働いた。その充実した年月を共有できたことに感謝するばかりである。そしてこれからも the number eight wire mentality を持ち続けたいと思っている。

追記：お世話になった協会の皆様に改めてお礼申し上げます。

なお、本文はすべて私の個人的な体験をもとに感じたことであり、一般化するものではありません。The number eight wire については、航海中のヨットに積載できる限られた資材での応急処置時に、“the repair is rough, but it’ll get you home” の意味で使われるように、「仕上がりは荒っぽい（大雑把だ）けれど、問題は解決できる」のような意味で用いられる場合も多いと聞きます。

（服部雅裕）

■　Aotearoa やさしさの循環する国で

第 3 回

「サンタ」の袋の中には

「有害な植物」と聞いて、みなさんはどんなものを想像するだろうか。山野でうっかり触ったらかぶれる恐れのある、ウルシぐらいしか知らなかったわたしは、ニュージーランドで有害指定されている植物の多さに驚いた。日本では観葉植物として売られているブライダルベールもその一つだ。香り高いジャスミンもだめ。可憐なツユクサもだ。ニュージーランドとゆかりの深いスコットランドの国花、西洋アザミも、見つけたら「雑草」として片っ端から引っこ抜くことになっている。

ハゴロモジャスミンも「雑草」扱い

ざっくりいえば、NZ 原生の固有植物(2700 種)の生態系を崩しかねないものはすべて御法度、ということらしい。北と南では気候が異なり植生も違うため、地域それぞれに固有植物がある。全国に分布しているのは約２割で、残りはその土地特有の植物ということになる。

一方、ヨーロッパからの最初の入植者が足を踏み入れてからの 180 年にやってきた外来種は 2 万種。うちの１％にあたる 200 種が「有害」と指定されている。十分な降水量と日光に恵まれ、人間にとって居心地の良い環境は動植物にも当てはまる。特に植物の成長の速さは特筆に値する。 環境保護省（Ministry of Conservation）は「見かけたら一掃を！」というスローガンとともに、町のあちこちに該当する植物を大きなカラー写真で紹介するパネルを立てて、駆除と根絶を啓発している。新たな外来種を持ち込まないための水際対策の厳しさも、世界でトップクラスだ。特に空港で

の荷物検査の厳しさは有名で、スーツケースの中身をひっくり返して行う、丹念な荷物検査は日本人にもお馴染みだ。外来生物の持ち込みに関しては、バイオセキュリティ法と有害物質・新生物法に加え、自然保護法や資源管理法など、様々な法の網がかけられている。

警告ポスター

根絶の目玉に上げられるのが西欧から渡来したゴース(Gorse ハリエニシダ　マメ科)と多年草のラグウォート(Ragwort キク科)だ。山吹色の濃い黄色なので、遠くからでも目につく。ゴースは昔は防風のための生垣用に、わざわざ植樹したものらしい。家畜は長く鋭いトゲがあるのを知っていて食べてくれない。花はココナツのような香りがするが、万一食べたら肝臓障害を起こす。これらはすべて繁殖力が強いので、抜いたら焼却処分が必要だ。完全に燃やさないと、あっという間に根をはりふたたび成長を始める。そして、燃やすことで刺激を受けた種もいっそう元気に発芽する、という悪循環に陥る。手作業で除去するのも難しい。だから根っこからスポンと、しかもサヤがはじけて種が飛ばないよう、取り扱いにはとても気を使う。退治の際は、大きな厚目のゴミ袋は欠かせない。枝振りの大きいものなら根っこごと、硬い幹が袋を突き破らぬように注意深く袋に押し込む。袋の重さは 20 キロを超えることも。赤いツナギとゴム長靴といういでたちで、大きな袋を肩にかつぎ広い牧場を歩き回る夫の姿は、まるで季節外れのサンタクロースだ。

ラグウォートの生える牧場で草をはむ牛

ゴースのトゲは長く鋭い

象も殺す、猛毒のクスリ

ノースランドの山奥にある露天風呂に出かけたときのこと。ゆっくりと湯につかりながら他の訪問客と会話を楽しむうちに、薬草の話になった。日本人が昔からドクダミやハトムギなどを利用してきたように、マオリも太古から Rongoā(ロンゴア) と呼ばれる薬草療法を口伝えで細々と受け継いできた。今でいえば、ホリスティック(HOLISTIC)医療の一種になるだろうか。人間を肉体だけでなく、精神などを含めた存在と捉え、治療の対象とする考え方だ。(ホリスティックは、「全体的な」という意味のギリシャ語に由来する)。西洋医学だけでなく、お祈りなど、さまざまな代替療法を取り入れ、患者自身の生命力を引き出し、治癒に結び付けることを目指す。

薬草を巡って露天風呂でひとしきり盛り上がったあと、一緒に湯に浸かっていたキウィのおじさんが「ロンゴアについて日本人としゃべったのは、君が初めてだ。記念に、骨折に効く手作りエキス

をあげるよ」と言い出した。わざわざ車まで取りに戻ってプレゼントしてくれたのが、ジャムの空き瓶に入った Tū Pākihi（ツゥパキヒ。toot とか tutu とも呼ばれる）だった。

驚いたことに、猛毒だ、という。葉はもちろんのこと、房状に連なった種、実、花粉にも毒があるらしい。ニュージーランドの有毒植物は約 100 種類以上あると言われるが、ツゥパキヒの毒はその強さで１、２を争う。ニュージーランドの森はヘビも大型の哺乳動物もおらず安全なイメージがあるが、そこらの藪や小川の脇にこんな猛毒の植物が生えていることはあまり知られていない。人間が中毒症状を起こすほど有毒植物を食べることはまずないので、亡くなる人の数は少ない。それでも毎年 70 人超が、病院で中毒症状の手当てを受けるという。

昔は、放牧された牛や馬がうっかりツゥパキヒの実を食べて死んでしまうことがよくあったらしい。ジェームズ・クック がニュージーランドに放牧した最初の羊が死んだのも、このツゥパキヒが原因だったという。ダニーデンではサーカスの象がこの実を食べて中毒死する事件もあった。「象をも殺す」植物の怖さは、ファーマーなら、基本中の基本の知識だと聞いた。大きなものでは高さ 6 メートル、幹は直径 30 センチにもなるが、たいていは 40 センチぐらいの小木で、楕円形の濃い緑の葉をつける。この葉を三日三晩かけて茹で（その間は十分な換気が必要）、取り出してオリーブ油につけ数週間から数ヶ月おくと香油ができあがる。使い方は、骨折した患部に塗るだけ。「皮膚が真っ黒になるけれど、それが当たり前なので心配しないで。ただ、決して内服しないこと」と最後におじさんはつけ加えた。

ちょうどその頃、整体師をしている知人が、「商売道具」の親指を傷めて休業せざるを得ない状況に追い込まれていた。ツゥパキヒの情報を伝えてみたら、さっそくネットで製品化されたものを探し出し、自ら「人体実験」をしたらしい。効果はてきめん。つけて数日で痛みは無くなり、無事仕事を続けられるようになった。同じ頃、人気のラグビー選手が骨折し「治療のために故郷の村へ里帰り中」とニュースで流れた。トンガかサモア出身の選手だったか。病院施設への入院目的の帰省でなく、村で長老による薬草治療を受けるという。彼がどの村で何を使って治療するかはトップシークレット扱いだった。頭にロンゴアが浮かんだ。後日、念のためツゥパキヒ の日本名を調べてみたら、三大猛毒のひとつドクウツギとわかり、二度驚くハメになった。

猛毒のツゥパキヒ

カワカワは口に苦し

日本ではあまり知られていない薬草のひとつに、KawaKawa（カワカワ）がある。どこにでも生えていて、葉はかわいいハート型をしている。ニュージーランドの翡翠はグリーンストーン（マオリ語で Pounamu）とよばれるが、グリーンストーンの緑はまさにカワカワの色。kawa は苦いという意味で、ピリッとしたマイルドな苦味が特長だ。マオリにとって大切な植物で、内服用にも外用にも広く愛され、リュウマチや炎症を抑える効能もよく知られている。ゴルフのプレイ中に脚を傷めた人が、その辺に生えていたカワカワの葉っぱを引きちぎって湿布し、プレイを続行した、という話も聞いたことがある。

NZ では今、ちょっとしたカワカワブーム。お茶用に乾燥させた葉が手に入るようになったし、筋肉痛のバーム（軟膏）としてもいろいろな種類が出回っている。わたしの住む町でも数年前にカワカ

ワバームづくりのワークショップが開かれた。参加した娘によると、いいバームができるかどうかは、葉を集める段階で決まってしまうらしい。キレイな傷のない葉と、虫に食い荒らされて穴だらけの葉、どちらが適していると思う？と聞かれ、はた、と考えた。正解は穴あき。なるべく虫食いの穴が多いものを選ぶこと。そして、葉摘の時間に適した時間帯を選ぶこと、の二つがポイント。虫に喰われた葉は虫食いの穴を自らの「傷」と捉え、その傷を治そうと葉がヒーリングプロパティ(治癒力)を集中させるから、薬効が最大に高まるのだそうだ。

このカワカワのお茶は、緊張した筋肉をほぐしリラックスさせ、また整腸剤としても最適で、血液浄化や腎臓機能の補助機能もあるという。わが家でも庭のあちこちに自生している葉を数枚ちぎり、沸騰したお湯を注いだり水出しにしたりして、一年中新鮮なハーブティーを楽しんでいる。葉摘に最適な時間、の詳細は、マオリ独特の時間の観念や太陰暦の暦に深い関係があるので、また別の機会に触れたいと思う。

葉がハートの形をしているので、慣れるとカワカワを見つけるのはたやすい。穴あきの葉を摘むのがポイント

わが家だけの蜜の味

コロナ禍のいま、さらに品薄になっているマヌカハニーも、もともとはマオリが抗生物質の代わりに使っていたものだ。骨折した競争馬の足に塗りつけたら治っただの、入院患者の潰瘍が良くなっただのエピソードに事欠かない。

数年前、敷地内に何十本かマヌカの一種「ピンクマヌカ」を植えた。聞きつけた友人が、養蜂の巣箱を置かせてくれ、と言ってきた。イイよと言ったら、蜂の入ったカラフルな木箱をお重箱のように垂直に積み上げて、トラックで運んできた。それ以来、置きっぱなし。月に一回ぐらいのペースで世話をしにやってくる。こちらも興味津々で作業の様子を見守るが、季節によっては巣箱の周りに働きバチが飛び回っていて、半径数メートルほどは近づけない。興奮するハチに燻煙を吹きかけると魔法のようにおとなしくなるのを見せてもらった。

見上げると、クマのプーさんでお馴染みの蜂の大群(swarm)が木からぶら下がっていてびっくりしたことも。この大群はうぉーん、という大きな音を出しながら、アコーデオンのように上下に伸び縮みする。

マヌカハニーは今や「POT of GOLD 」(壺入りの金)と表現されるほど、高い価格で取引されるようになった。道路脇においてあった養蜂の箱がごっそり盗まれる、という事件も起きている。盗難予防のために、箱には GPS 装着が欠かせないそうだ。だから、道路からうんと奥まったわが家の敷地内で飼育できるのはありがたい、と友人は言う。場所代の代わりというわけでもないだろうが、時折、採れたての蜂蜜を分けてくれる。わが家で採れる蜂蜜はマヌカ以外の花の蜜も混じっているらしく、色は少し明るめだ。サラサラすぎる時には、そのまま冷蔵庫にねかせて好みの固さに調整する。

数年前までは、自宅敷地内に咲くマヌカから採った生(非加熱)の蜂蜜が食べられるなんて考えたこ

ともなかった。出会った頃はコーヒーに山盛り砂糖を入れていた夫も、いまは蜂蜜一辺倒だ。大方が輸出に回されてしまうため、マヌカハニーの価格は20年前に比べると価格は３倍近い。ふだんづかいしにくいものになってしまったが、わが家では飲み物はもちろんのこと、料理やケーキ、パン焼き、ケガ(ペットも含む)や喉の痛みの手当て、など、いろいろな場面で贅沢に使っている。持つべきものは友、である。

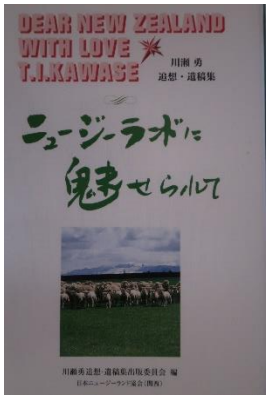
（さかい ケイツ みか　Whangarei 在住）

■　ニュージーランドに魅せられて　川瀬勇追想･遺稿集電子化

20年前に 当協会の有志による委員会が編集し、660部 を出版販売した270ページの書籍「ニュージーランに魅せられて―川瀬勇追想・遺稿集」電子化のお手伝いをしています。

川瀬勇農学博士（1908-1999）は日本人としてはじめてNZへ留学(1931-1933）、帰国後日本における牧草地農業の研究、教育、指導の草分けとなりました。日本で初めてのNZ総合ガイドブック出版（1941丸善）日本草地学会の創立者の一人(1954)、また日本NZ協会の創立者の一人かつ副会長（1959駐日NZ大使が会長)、そして当協会の創立者(1970)です。1979年にはニュージーランド政府よりQSO勲章受勲、授与証にはエリザベス女王（ニュージーランド元首）の署名があります。1990年より2000年までほぼ各年でクライストチャーチ、ウェリントンで開催された「Festival of Japan」への貢献により、1995年日本国外務大臣表彰。1999年8月24日、同フェスティバル終了の翌日、 第二の故郷クライストチャーチで逝去。享年91歳。その死まで当協会会長。本年7月7日に日本NZ協会の片山愛一氏より「後世に残すべき記録として」電子化の提案がありました。出版委員長だった柳田勘次名誉会長に相談のうえ、準備に入りました。7月２８日当協会理事会は電子化了承と完成後のホームページ掲載を決定しました。追想・遺稿集には64名の執筆者による83点の著作物があります。電子化には著作権者からの許諾が必要ですが、うち32名は故人でした。いまだに3名のご遺族に連絡が取れておりません。校正にも時間を要します。電子化は「社会の共有知的財産」化です。用語の統一、人名、組織名の確認、歴史的事実との照合が不可欠です。

片山愛一氏は電子化の全体構想と作業を無償でお引き受けくださいました。心から感謝しております。年内には完了して、会員だけでなく、NZへ関心のある方々が検索閲覧引用（もちろん無料です）できるようにしたいと願っております。



（呉橋眞人）

■　Do you know WWOOF（ウーフ)?

10年ほど前にシドニーでウーフのことを知り入会しましたが、帰国日が迫っていて残念ながら現地で経験することができませんでした。帰国後、友人たちに聞いてもワーキングホリディのことは知られていましたが、ウーフのことは殆ど知られていませんでした。

ウーフは“World Wide Opportunities on Organic Farms”が正規の名称です。「食事・宿泊場所」と「力」そして「知識・経験」:を交換します。単なる交換ではなく、ホスト（有機農家・持続可能な生き方に取り組む自然体験学校・農家民宿・農家レストラン）とお手伝い側（旅人）との温かなコ

ミュニケーションを大切にしています。1971 年に英国で誕生し世界中に組織があり、特にオーストラリア・ニュージーランドで発達しました。日本では 1994 年から始まり 2002 年から本格的に活動しています。北海道から沖縄まで約３５０の農家（ホストが登録しています。若者だけでなくシニアの方も各地で活動しています。週末だけの活動もできますが、活動に参加するには、最初に登録料（初年度 5500 円、以降は低減、海外でもほぼ同額）が必要です。仕事内容はホスト先の状況で異なりますので事前打ち合わせは肝要です。新型コロナウイルスの影響で故国に戻れない外国人も活動しています。この制度では賃金は得ることができない代わりに、宿泊場所と食事の提供が受けられます。詳しくは、図書「旅とオーガニックと幸せとWW00F 農家とウーファーたち」、ホームページ http://wwoofjapan.com ニュージーランドについては、https://wwoof.nz を検索してください。

コロナウイルス感染問題がある程度収束すれば日本のどこかで体験したいと思い、札幌の事務局に連絡したら共同代表の星野氏は海外で足止めになりまだ帰国されていないそうです。会員の多数は都会暮らしでこれから農業経験は難しいかもしれませんが、お孫さん年代層には国内外で貴重な体験が出来るのではないでしょうか。原則は、1 日に６時間程度のお手伝いで 3 食・部屋付です。検索すればいろいろな体験談が出ています。

（石井久行）

■　事務局の暫定的移転

監事の中村さんの事務所を２０１４年から借用していましたが、１０月末で借用できなくなりました。事務局設置をお引き受けいただき有難うございました。会則２条では「本会の事務局は、大阪市西区江戸堀１―２３―２６　西八千代ビル３階Ｃ N.S.コンサルタント内に置く」と明記しています。正式には新しい事務局への移転は会則変更を総会で承認する必要がありますが、新型コロナウイルス感染状況のもと臨時総会を開催し、会則変更を求めることは現実的ではありません。また、新しい所を早急に見つけることは困難です。ついては、暫定的に石井会長の自宅に事務局を移転するのが現実的だと考えます。会員の皆様の中で今後、事務局を引き受けて頂ける方を募集致します。来年度の総会で正式に決定したいと思いますが、本件につきご了承頂きたく存じます。ご意見などございましたら１０月末までにお知らせください。事務局には、ノートＰＣ１台、各種資料・図書・国旗等が入ったプラスチックケースが３個と歴代会長の名前が入った額一つを保管しております。

【暫定的事務局所在地】

〒５５８－０００４
大阪市住吉区長居東２－１７－２８―４０７
石井久行（自宅）　　長居公園へ数分
Tel/Fax：０６－６６０７－２１１２

■ ご寄稿･ご提案のお願い

ＮＺに関する旅行記・随想・ＨＰ紹介などのご寄稿をお願いいたします。次号（３月号）の締め切りは２月末です。
また、例会・会報などのご提案も併せてお待ちしております。